

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25360021

研究課題名(和文) 中国の「乱民」現象の文化的・歴史的底流に関する総合的研究

研究課題名(英文) the Comprehensive Research for the historical and cultural undercurrent of "Luanmin", rufuuiian, mobster phenomenon in China

研究代表者

趙 軍 (ZHAO, Jun)

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：30301831

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は主に、(1)近代ナショナリズム発展史の視点からの検討、(2)社会文化史などの視点から中国の民族性・国民性に対する検討、(3)歴史教育の内容と問題点に対する検討、という3つの手法を運用し、文献解読と実例分析を通して、中国における「乱民」("Luanmin", rufuuiian, mobster)騒動の歴史的背景、文化的背景、教育システムからの影響、そして政治や外交との関係と距離などを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research adopts three analysis methods, (1)the study from the standpoint of the history of modern nationalism development, (2)the study about Chinese nationalism and ethnicity from the standpoint of the history of social-culture, (3)the study about history education and its problem, and uses literature study and case study, establish historical and cultural background of "Luanmin", rufuuiian, mobster phenomenon, educational system influence and the concern with politics and diplomacy.

研究分野：人文学

キーワード：乱民 歴史教育 ナショナリズム・民族主義 アジア主義 愛国主義教育 日中関係

1. 研究開始当初の背景

近年中国で繰り返された所謂「反日運動」は、しばしば「乱民」(“Luanmin”, rufuian, mobster) 騒動に伴って発生し、その規模と発生地域もどんどん広げていく様相を呈している。こうした極端な手段を執った「乱民」騒動の形で現れた「反日運動」は、往々にして、官民を問わず長年に亘って地道な努力で少しずつ築いてきた日本と中国との政治・経済・文化など諸方面の交流関係をたちまち大きく後退させ、日中関係に緊張状態をもたらしている。中国の「乱民」騒動それ自体が巨大な物質的・精神的破壊力を持っていると同時に、その異常な表象はマスコミの集中報道などによってさらにクローズアップされ、日中関係の「悪化」のシンボルになる。

しかし、これまで、中国の「反日運動」とその背景を取り上げる学術的研究は、ほとんど政治学と社会学の視点からのものが多く、「乱民」騒動の原因は「憤青(怒りの青年たち)」と「流民(失業者・出稼ぎ労働者)」の存在などその時々々の社会事情や政治情勢など現実的要因に総括され、歴史的・文化的背景は等閑視されている。このような手法も「乱民」騒動や「反日運動」の幾らかの直接的な原因を突き止めることができるが、騒動はなぜ周期的に発生し、なぜ似通った様相で繰り返し再発するか、そして純粋な国内的原因で発生された「乱民」騒動とはどこが違うか、などの疑問に答えるとき、無力感が強く感じられることは否めない。

2. 研究の目的

(1) 近現代中国における「乱民」騒動(デモ行進の暴徒化、民衆による強奪・暴力事件など)を一つの社会現象として扱い、その抗議・反対の目標が主に外国及び外国人に指向したものに焦点を絞って、政治思想史・社会文化史・民族史・社会教育史などの視点から、「乱民」による騒動を複合的な視点で文献資料と調査資料中心で検証・分析することにあ

る。

(2) 上述した作業を通して、「乱民」現象の裏に潜んでいる文化的・歴史的底流を探って、「辛抱強い」平民を「乱民」に激変させて、騒動を醸成した諸背景と勃発させる環境・タイミングの相互関係を検討し、近現代アジアにおけるナショナリズムの発生・高揚期の特徴と法則の解読を試みる。

3. 研究の方法

本研究は上記研究目的の実現のために、基本的に以下の3つの方法を採用した。

(1) 近代ナショナリズム発展史の視点からの検討。アヘン戦争以降110年間の中国近代史は屈辱と侮辱に満ちた歴史であることに注目し、近代日本のナショナリズムの発生史に照らしながら、近代中国のナショナリズムの内容と特徴を分析し、「自豪(民族的誇り)」と「自卑(民族的劣等感)」が同棲している中国の民族主義がどのような形で「乱民」騒動に屈折しているかを明らかにする。

(2) 社会文化史などの視点からの中国の民族性・国民性に対する検討。数千年の中央集権体制の維持と王朝更迭劇の繰り返しは、辛抱強さと「無法無天(法も神も眼中に置かない)」の両面的性格を持つ庶民たちが育ち、近代以来の中国の民族性と国民性の土壌を醸成した。本研究では、文献解読と事例研究を中心に、社会的環境(「外部的」要因)と一個人としての反応・性格の改変(「内部的」要因)という絶えずに互いに影響し合う関係の中において、庶民たちの政治意識(「政治不信」と「政治に熱中」の両極から)・法意識・対外認識・社会環境からの影響とその反動などの諸側面を総合的に検討する。

(3) 歴史教育の内容と問題点に対する検討。歴史教育は、学校や歴史教科書だけによる教育ではなく、さまざまな博物館・記念館、テレビやインターネットに溢れた歴史や現実をテーマとした番組・情報、親や親族・友人・隣人などによる家庭・交友環境の薫陶、等々、

至る所、歴史教育の舞台である。本研究は学校教育と社会教育など複数の教育空間を含む分野に視野を広げ、中国における歴史教育の主な内容・特徴・問題点などを検討する。

なお、本研究は海外研究者たちとの国際交流と国際共同作業を重視し、これまで、北京大学歴史学系、華中師範大学中国近代史研究所、中山大学歴史学系、台湾中央研究院近代史研究所など研究機関との間、現地で開催される国際シンポジウムや共同研究への参加、海外の研究者を招聘し日本での国際シンポジウムや本研究のワークショップ・講演会への参加、などの形を通して、国際的と学際的交流活動を実施してきた。

4. 研究成果

研究成果として明らかになったのは、以下の諸点である。

(1)近代ナショナリズム発展史の視点からの検討。

近代以来の中国の歴史は、世界中の列強諸国からの侵略を受けて、不本意な開戦・敗北そして不平等条約の強制といったプロセスを繰り返した対外戦争を十数回体験してきた歴史であるため、対外関係史の大半は「侵略・いじめ」を受けた歴史だったと言っても過言ではない。そのため、外国・外国人に接するとき、まずは「被害者」である心理が働き始め、「警戒心」「敵愾心」的な心理が湧きやすい。長い封建時代から持ち続けてきた「天朝上国」のプライドとのあいだの落差はあまりにも大きかった。一方、近代以来数々の対外戦争の中に、「抗日戦争（日中戦争）」は中国側が勝利を勝ち取った唯一の対外戦争であり、現在の執政党である中国共産党も重要な役割を果たした戦争でもあった関係で、抗日戦争の勝利とその歴史的意義は、民族的自尊心の樹立とナショナリズムの高揚にとって重要な意味を持っている。一方、「中国革命の父」である孫文の時代から中国共産党の各時代の指導者まで、「霸道（物的パワ

ーを重んじる理念・哲学）」と対照する「東洋的王道（精神的パワーを重んじる理念・哲学）」の理念、つまり非西欧的価値観の創生に目を配り、東洋的伝統理念に基づく価値観で「世界を再定義」する形で新しい時代の中国ナショナリズムのあり方を模索し続けている。本研究は、資料解読の面において、政治家・理論家・マスコミの代表的な言論家から、軍人、一般市民、そして時代の流行を真っ先に感知する現代の大学生まで、考察の対象層を広く設定し、近現代中国におけるナショナリズム・民族主義の創生・発展・高揚・変質など各段階においての内容と特徴を考察・整理した。使用された資料は、主に中国国内と日本に近年出版されたさまざまな資料集、回想録、学術的研究、学位請求論文、及びインターネットに公開された各種の調査報告、事例紹介と分析などである。本来、本研究は中国国内でのアンケート調査をも予定していたが、具体的実施上、難度は極めて高いと分かり、その代わりに、次のような形を採用した。即ち、具体的事例としては、中国の現役大学生や若者たちへの個別調査と交流会などを挙行し、個人対象のインタビューやグループインタビューを行う。社会全体的なイメージと歴年の推移状況としては、日中共同で行われる恒例的アンケート調査の報告書を分析した上での利用、という方法を執った。参照値として、教育システムがだいぶ違っている台湾・香港での事例をも取り入れている。

また、近代ナショナリズムの発展史において、近代日本のナショナリズム（「大アジア主義」「国粋主義」「対外硬」「大東亜共栄圏」など）の創生と発展も、中国などアジア周辺諸国にとって、手本・ライバル・闘いの相手など多種多様な役割を果たしており、近代日本のナショナリズムがなければ、近代中国のナショナリズムの内容と様相も違うものになっているかも知れないという発想から、頭

山満・内田良平など「伝統的右翼」から「民族主義派」と自称する現代「右翼」まで、「急進的民族主義者」という見方で捉え、事例研究と比較研究を行った。

(2)社会文化史などの視点からの中国の民族性・国民性に対する検討。

中国人の民族性・国民性に関して、近代以来、大勢の日本人（とりわけ「支那通・中国通」と呼ばれた人々を中心となっている）が論文・書籍・体験談などさまざまな形で披露して、解説か放談していた（その最も代表的な「成果」は、内田良平の『支那観』、川島浪速の『対支那管見』、平野義太郎の『大アジア主義の歴史的基礎』、小寺謙吉の『大亜細亜主義論』等々があった）。しかし、その数々の言論の中には「换位思考（相手の立場に立って考える）」に基づいて相手の気持ちに気配りしながら巨視的・全面的な視点に据えて、意表を突いた調査や分析結果に理性的に分析・対応できる著者と研究者はほんの僅かであった。「中国人は不可解だ」という一言で片付けることは簡単だが、歴史的・文化的視点から、中国の庶民たちの政治意識・法意識・対外認識などを総合的に解明することは問題の解決につながっている。日常環境下の「順々なる良民」と非日常的環境下の「暴れ放題の暴民」の相対する性格が、環境・条件によって、同一人物の身に現れ得る社会環境変動の激しさなどが、「法不責衆（すべての人を法で処罰するわけには行かない）」という共通の冒険意識は、無法行為に対する社会的寛容と無力状態を形成した。「替天行道」という農民蜂起のイデオロギーにつながった「造反有理」「愛国無罪」などのキャッチフレーズは、「良民」を動員する際の最も有力な武器である。これも昔からの「乱民」騒動の伝統と言えよう。極端的な環境下、下からの言論統制とテロリズムさえ発生し得る。本研究は、これらのプロセスと関係ある諸側面を、主に政府からの公式文書と政策、

マスコミの敷衍と呼びかけ、一般庶民の理解と呼応、などの視点から状況分類・整理し、異なるケースの背景と動機を分析し、日中間の相違、中国人としての民族的特徴を中心として、心理学・社会学などの視点からの検討を行った。

なお、王朝交代劇の結局、庶民はいつも政治的駆け引きの犠牲になった歴史的教訓から、体制と大きな距離を置き、政治に対して常に不信を抱くことは、中国社会の最下層に置かれた大衆の一貫した政治姿勢である。政治への不信・反感は如何なる条件下に「良民」を「暴民」に変身させたか、その具体的条件とプロセスを検討してみた。

(3)歴史教育の内容と問題点に対する検討

戦前の中国の歴史教育は、民族的危機に晒される時期において、「救亡（国を滅亡の危機から救う）意識」の育成は自然に教育の重要使命として強調され、「抗敵」中心の教育は学校の内外を問わず行われた。それ以外の時期においては、漢民族の歴史を中心とする自国史の教育が行われた。歴史教育の内容を時代別で見ると、むしろアヘン戦争までの古代史の内容は圧倒的に多かった。

戦後、とりわけ中華人民共和国が建国以来、歴史教育のメイン・テーマは、「国際主義教育」「英雄主義教育」から「愛国主義教育」へと移り変わってきた。歴史教育も「厚今薄古（近現代のものを重んじ古代のものを軽んじる）」という方針の下に、アヘン戦争以降の近現代史は最も重要な内容となり、「列強諸国の中国侵略史」と「中国共産党指導下の中国人民の帝国主義・封建主義・官僚資本主義反対の歴史」に関する記述と説明は、歴史教育の最も重要な2本のメイン・ラインとなった。歴史教科書の内容などは、「文化大革命」を挟んでその前・後と「文革」期間中、何回も大きく改訂されていたが、小中高校までの歴史教育は、教科書から大きくはみ出すことはできない関係で、むしろ政府の教育方

針と外交政策に沿った、バランスの取れた教育内容だと言える。一方、社会教育の分野では、戦後の初期・中期と比べると現在の中国においてすでに大きな進歩を遂げたとは言え、人民の「敵」・民族の「敵」を矮小化・単純化しがちの文芸作品が溢れ、複雑な歴史問題を単純化する傾向を持つ作品は依然として大量に製作・公開されている。教師たちの歴史認識、そして父母たち及び中国社会全体の日本に対するイメージ・不信感・警戒感などは、教科書の内容を遙かに超えていて、学生・若者に学校教育以上の強い影響力を果たしている。本研究の担当者は、北京・上海・広州・深圳・武漢・鄭州など中心的都市から、経済的発展の遅れた甘肅省・内モンゴル自治区など奥地の農村地域まで、各地の小中高校を訪問し、現役大学生と座談会・読書会を開催し、多くの「愛国主義教育基地」を見学し、歴史教科書及び教師用教材を蒐集・検討し、さらに歴史教科書の編纂者や地方政府の教育行政の責任者らと意見交換会・聴取会などを行い、多くの研究材料を入手できた。それに基づいて、日本の歴史教育（特に近現代史に関する教育）、台湾や香港での歴史教育と比較しながら、こうした歴史教育の格差から生まれた「日中両国民間の歴史認識の格差の具体像」、及び「現実の日中関係に対してどのような影響を与えているか」を、「学校教育」と「社会教育」を大別して検討した。その一部の研究成果はすでに学会などで報告し、多くの関連する研究者から広く助言や批評を受けてきた。

なお、本研究の諸成果を踏まえ、中国における「乱民」現象を総合的に取り上げる研究著書も現在執筆中であることを付記したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

趙軍、「“散砂”“群氓”“亡国の民”に彷徨

う中国人“国民性”への認知 敗戦まで日本インテリ層の中国認識をめぐって」、千葉商大紀要、査読有、第54巻第1号、2016、pp.1-18

趙軍、「中国における“憤青”現象とその社会的環境(特集 中国経済と社会)」、CUC view & vision、第41号、2016、pp.30-35

趙軍、「異民族の目に残された歴史の記憶 日本語ガイドブックに記録された旧満州の建造物・装飾物を中心として」、千葉商大紀要、査読有、第51巻第2号、2014、pp.21-36

[学会発表](計7件)

趙軍、「“亞洲夢”與日本右翼 頭山満・内田良平の中国觀及对中国革命的参与」、2016年11月15日、中国社会科学院・広東省政協主催「世界視野下的孫中山與中華民族復興 記念孫中山誕生150周年国際シンポジウム」、広東・中山市

趙軍、「内田良平の中国觀與对中国革命的参与 大亞洲主義理論與実践的個案分析」(招待講演) 2016年10月29日、中国社会科学院近代史研究所・湖北省社会科学界聯合会・武昌辛亥革命研究室・辛亥革命武昌起義記念館ほか主催「記念辛亥革命105周年国際學術研討会」、武漢・東湖賓館

趙軍、「“散砂”“群氓”“亡国の民”に彷徨う中国人“国民性”への認知 敗戦まで日本インテリ層の中国認識をめぐって」、2015年11月21日、日本華人教授会議主催「戦争・対立から平和へ - 歴史研究の現場からのメッセージ - 戦争70周年記念国際シンポジウム」、市川市・千葉商科大学

趙軍、「憚代英研究在日本」、2015年8月29日、華中師範大学主催「記念憚代英誕辰120周年學術研討会」、武漢・華中師範大学

趙軍、「墮落為醜陋工具的“提携”與“共榮” 侵略戦争與“大亞洲主義”的末路」、

2015年8月20日、台湾中央研究院近代史研究所主催「全球視野下的中国近代史研究国際學術研討会」、台北・中央研究院

趙軍、「頭山満、内田良平の中国觀與对中国革命的支援 亞洲主義理論與実践の個案分析」、2014年8月11日、台湾中央研究院近代史研究所主催「全球視野下的中国近代史研究国際學術研討会」、台北・中央研究院

趙軍、「清末海軍の近代化與日本国權主義の台頭・民間右翼の形成」、2014年6月29日、武漢大学台湾研究所ほか主催「甲午双甲子學術討論会」、武漢大学・台湾研究所

[図書](計4件)

趙軍 他(黄自進、潘光哲主編)、台湾・稻郷出版社、『近代中日關係史新論』、2017、pp.816。趙軍担当部分:「留日同学会與武力背景下的中日“提携” 侵略戦争與“大亞洲主義”の末路」、pp.301-336

趙軍 他(華中師範大学中国近代史研究所編)、華中師範大学出版社、『章開沅先生九秩華誕記念文集』、2015、pp.664、趙軍担当部分:「『内外時事月函』折射出来的辛亥革命側影」、pp.330-365

趙軍 他(王晓秋主編)、北京大学出版社『辛亥革命與世界 北京大学記念辛亥革命一百周年国際學術討論会論文集』、2013、趙軍担当部分:「亞洲主義、亞洲共同体理念的对立與衝突 孫中山、石原莞爾の比較」、pp.214-233

趙軍 他(謝守成主編)、華中師範大学出版社、『記念惲代英誕辰120周年學術研討会論文集』、2016、pp.494、趙軍担当部分「惲代英研究在日本」

6. 研究組織

(1)研究代表者

千葉商科大学・商經学部・教授

趙 軍 (ZHAO JUN)

研究者番号: 30301831

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

高綱 博文 (TAKATSUNA HIROFUMI)

日本大学・通信教育部・教授

研究者番号: 90154799